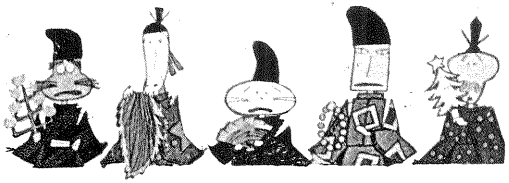
サラ文庫

かぐや姫

厚生省児童福祉文化賞受賞　まんが日本昔ばなし 第十六話

サラ文庫



0171-761238-7339(0)

まんが日本昔ばなし

かぐや姫

「かぐや姫……。わしは、おまえなしで、なにがいきしても、しあわせになれん……」

かなしみにくれたおじいさんは、やがて、かぐや姫のくれた不老長寿のくすりを、火のなかにくべてしまいました。

かぐや姫のいない、いまとなっては、もう不老長寿のくすりなど、もっていたくはなかったのです。

おじいさんの、おもいをたくしたほのおは、かぐや姫のいる月にむかって、たかく、たかく、のぼっていきました。

●まんが日本昔ばなし全集

《第一巻》
①桃太郎
②竜の淵
③たにし長者
④ちょうふく山の山姥
⑤鶴の恩がえし

《第二巻》
⑥一休さん
⑦貧乏神と福の神
⑧七夕さま
⑨大工と鬼六
⑩風の神とこども
⑪浦島太郎
⑫髪長姫
⑬ねずみのすもう

《第三巻》
⑭天福地福
⑮かもとり権兵衛
⑯かぐや姫
⑰古屋のもり
⑱三枚のお札
⑲たのきゅう
⑳夢を買う

《第四巻》
㉑金太郎
㉒鉢かつぎ姫
㉓天狗の羽うちは
㉔定六とシロ
㉕きき耳ずきん

《第五巻》
㉖証城寺の狸ばやし
㉗耳なし芳一
㉘おいてけ堀
㉙初夢長者
㉚乞食のくれた手拭
㉛花咲かじいさん
㉜小太郎と母竜
㉝猿地蔵
㉞力太郎
㉟雷さまと桑の木

《第六巻》
㊱ぶんぶく茶釜
㊲養老の滝
㊳塩ふきうす
㊴しっぽの釣り
㊵豆つぶころころ

《第七巻》
㊶一寸法師
㊷八つ化けずきん
㊸キジも鳴かずば
㊹かしき長者
㊺笠地蔵
㊻牛若丸
㊼熊ときつね
㊽きつつきと雀
㊾湖の怪魚
㊿たぬきと彦市

《第八巻》
(51)こぶとり爺さん
(52)赤ん坊になったお婆さん
(53)雪女
(54)牛方と山んば
(55)地獄のあばれもの
(56)かちかち山
(57)イワナの怪
(58)絵姿女房
(59)大沼地の黒竜
(60)天狗のかくれみの
(61)舌切り雀
(62)猫檀家
(63)みそ買い橋
(64)羅生門の鬼
(65)はなたれ小僧さま
(66)さるかに合戦
(67)たこ八長者
(68)大歳の火
(69)十二支のはじまり
(70)八郎潟の八郎
(71)オオカミと娘
(72)かっぱの雨ごい
(73)旅人馬
(74)にせ本尊
(75)宝の下駄

《第九巻》
(76)あとかくしの雪
(77)ねずみ経
(78)山伏石
(79)木仏長者
(80)そこつ相兵衛
(81)船ゆうれい
(82)あずきとぎ
(83)子育てゆうれい
(84)ゆうれいの酒もり
(85)ふとんの怪談
(86)わらしべ長者
(87)水の種
(88)へび女房
(89)猿神たいじ
(90)人参とごぼうと大根
(91)田植え地蔵
(92)うぐいす長者
(93)かみそり狐
(94)赤神と黒神
(95)かっぱのくれた妙薬
(96)馬方とたぬき
(97)百合若大臣
(98)座敷わらし
(99)きつね女房
(100)仁王とどっこい

《第十巻》

《第十一巻》

《第十二巻》

《第十三巻》

《第十四巻》

《第十五巻》

《第十六巻》

《第十七巻》

《第十八巻》

《第十九巻》

《第二十巻》

（以下続刊）

（予定）

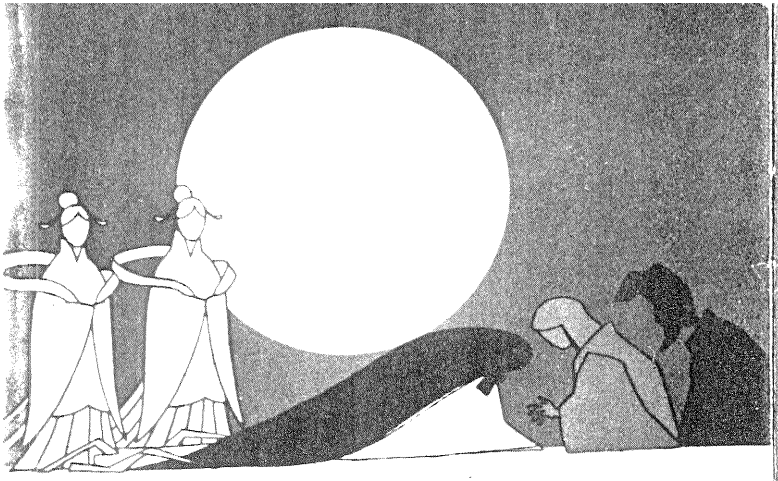
まんが日本昔ばなし
かぐや姫（第十六話）　サラ文庫

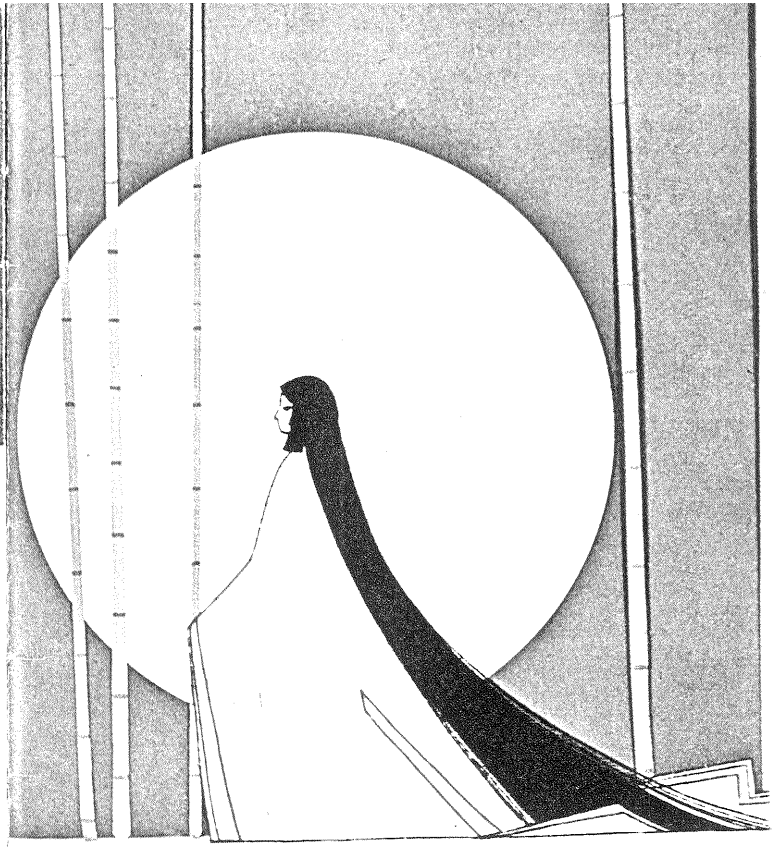
©愛プロ／グループ・タック

昭和51年7月20日　初版発行
昭和55年12月25日　25刷発行
発行・二見書房　東京都千代田区三崎町2-18-2　電話　東京03(263)0034
印刷／大日本印刷株式会社・装幀／森下年昭・レイアウト／グループ・ハンデ

かぐや姫は、ちいさなふくろを、さしだしました。そのなかには、いつまでも生きつづける、不老長寿のくすりがはいっていたのです。

こうして、かぐや姫は、とおい月の都へと、かえっていきました。





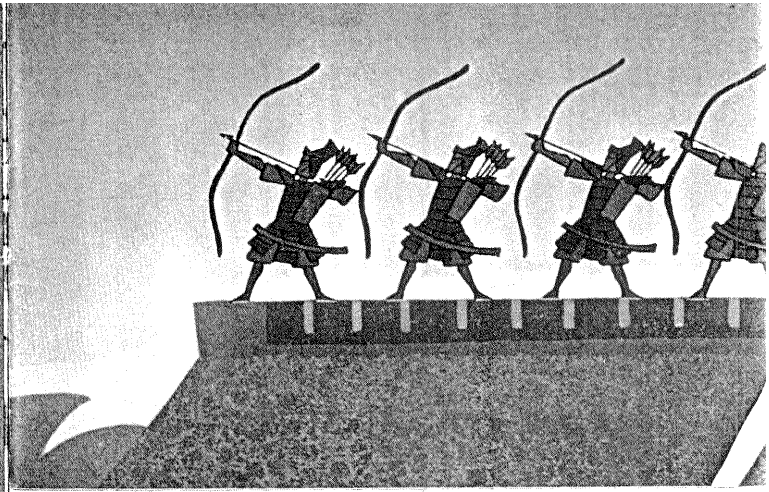
天女と天馬は、ゆっくりと、まいおりてきます。

すると、かぐや姫は、まるですいよせられるように、月の光りのなかに、しずかに、たっていきました。

おじいさんもおばあさんも、もう、どうすることもできませんでした。

かなしい、わかれのときが、やってきたのです。

「おじいさん、これを……」

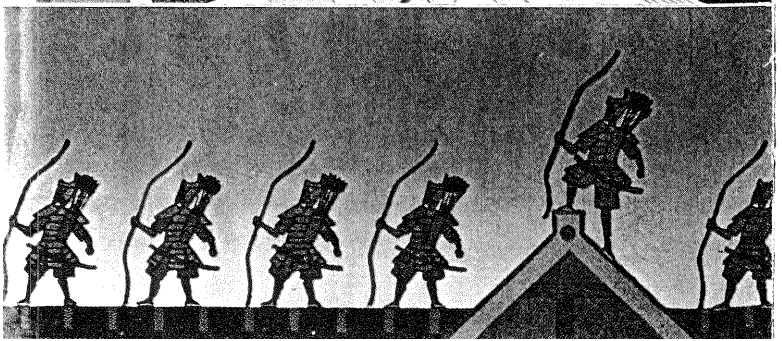


かがやく月の、光りのわが、ひろがっていきます。

さむらいたちは、いっせいに、弓に矢をつがえて、ひきしぼりました。

ところが、どうしたことでしょう。月の光りにつつまれると、さむらいたちは、きゅうに力がぬけて、ばたばたと、たおれてしまったのです。

そして、月のなかから、天女と天馬があらわれました。



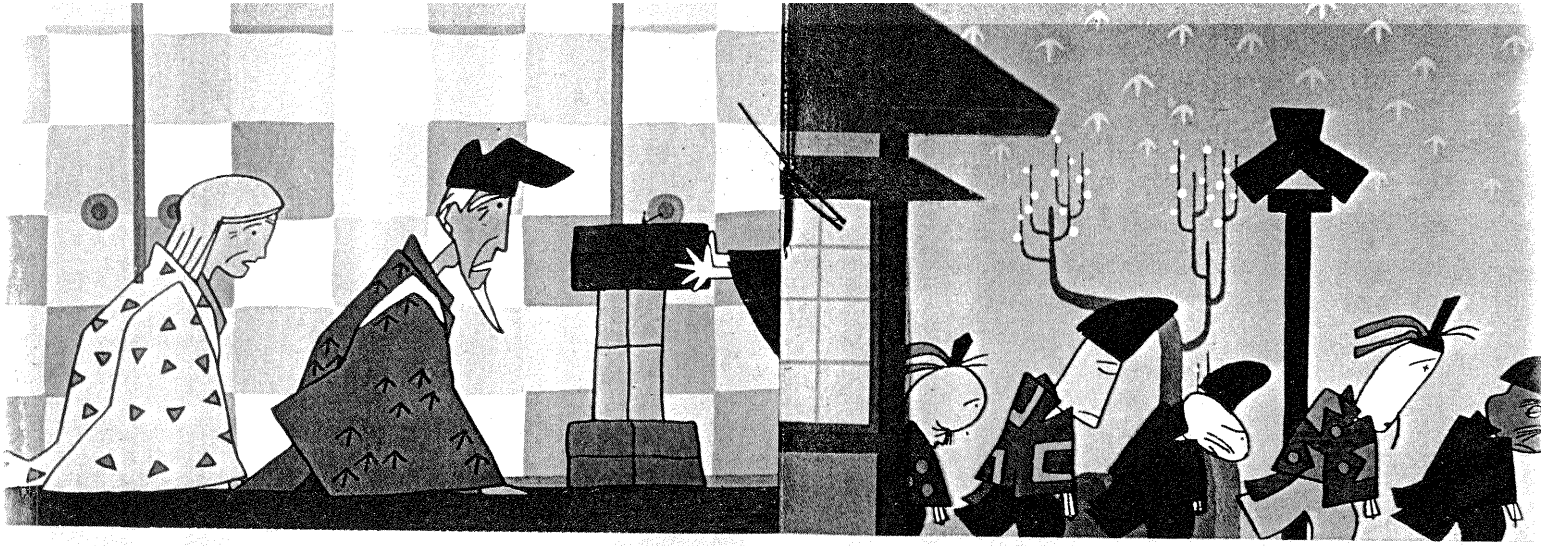
「なに、十五夜。それなら、あしたのばんではないか」
おじいさんは、たいそう、おどろきましたが、
「なんの、そなたは、わしらのむすめじゃ。だれにもわたすものか」

そして、いよいよ十五夜のばん。
おじいさんは、あらんかぎりの手をつくして、かぐや姫をつれもどしにやってくる月のつかいを、おいかえそうとしました。おおぜいのさむらいを、まもりにつけたのです。
そして、おばあさんとふたりで、かぐや姫を、おくのへやにかくまいました。
やがてひがしの空に、十五夜の、まるい月がでました。

「はい。八月の十五夜のばんに……」
かぐや姫は、そういって、うつむくのでした。

「姫や、なぜ月をみて、そんなにかなしむのじゃ」
かぐや姫の、かなしそうなようすに、おじいさんもおばあさんも、たいそうこころをいためて、そのわけをたずねました。
「ああ、いつまでも、いつまでも、わたしはおふたりのそばにいたい。でも、わたしは……月へ、かえらなければなりません、わたしは、月の都のものなのです」
かぐや姫は、きえいりそうな声で、いうのでした。
「なんと、月の都じゃと！」
「はい。月の都にすむものは、おとなになったら、かならず、もどらなければなりません」
「それは、いつじゃ？」

さて、月の光りが、そのかがやきをまして、十五夜がちかづいてきました。
すると なぜか、かぐや姫は、だんだんげんきが、なくなってきたのです。



これできっと、あきらめるだろうと、おじいさんはかんがえたのです。

ところが、どうでしょう。おとこたちは、みんな、ちゅうもんのしなを、もってきたではありませんか。

どれも、これも、この世のものとはおもえないほど、うつくしくて、りっぱなたからものばかりです。

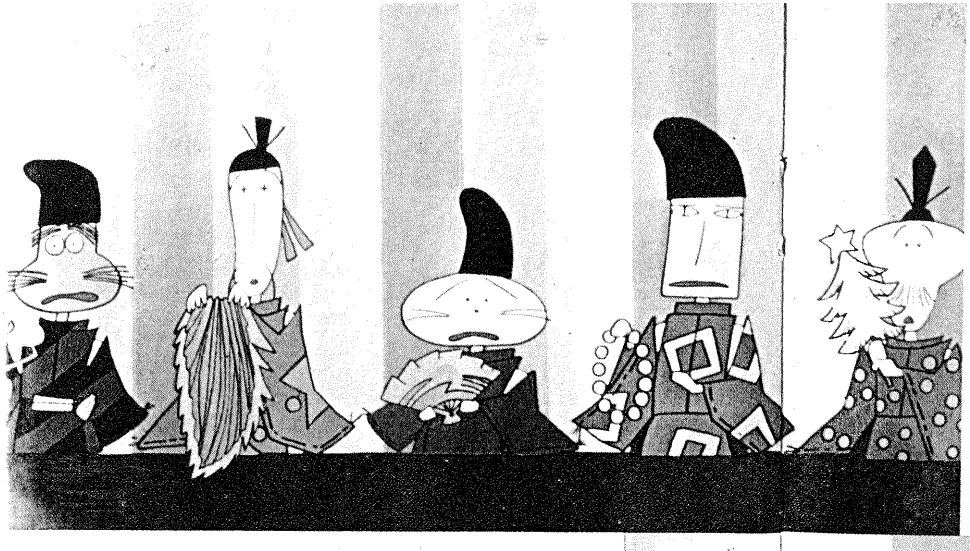
おじいさんは、すっかり、こまりはててしまいました。

ところが、かぐや姫の、光りかがやく、ほんもののうつくしさのまえでは、みせかけのうつくしさなど、すぐにそのうそが、ばれてしまうのでした。

たからものは、みんな、にせものだったのです。

おとこたちは、すごすごと、かえっていきました。

こまったおじいさんは、
「なんとかして、うまくことわるほうほうは、ないものか」
と、かんがえました。
そして……
「うん、これだ！」
おもいついたのは、むずかしいちゅうもんを、だすことでした。
「それでは、あなたは、光りのみのなる金のえだを、もってきてください」



「あなたは、金の毛がわ」
「あなたは、光りを、はなつ、おうぎ」
「あなたは、りゅうの目だまのくびかざり」
「あなたは、やみをてらすいろがみです」
それをもってくることができたら、かぐや姫を、よめにやろうというのです。
けれどもどれも、むりなちゅうもんでした。

そして、三月とたたないうちに、かぐや姫は、それはそれは、うつくしいむすめになりました。

その、かがやくばかりのうつくしさに、みた人は、おもわずうっとりと、みとれてしまうほどでした。

そのうちに、うつくしいかぐや姫のうわさは、国じゅうにしれわたりました。

というわけで、たくさんのおとこたちが、まいにち、まいにち、たずねてくるのです。きぞくや、だいじんや、わかものたちが、いっぱいつめかけて、門のまえに、ぎょうれつができるほどでした。

おかげで、竹とりじいさん
の家は、たいそうなお金もち
になりました。

おじいさんは、そのおんなの子を、家につれてかえりました。

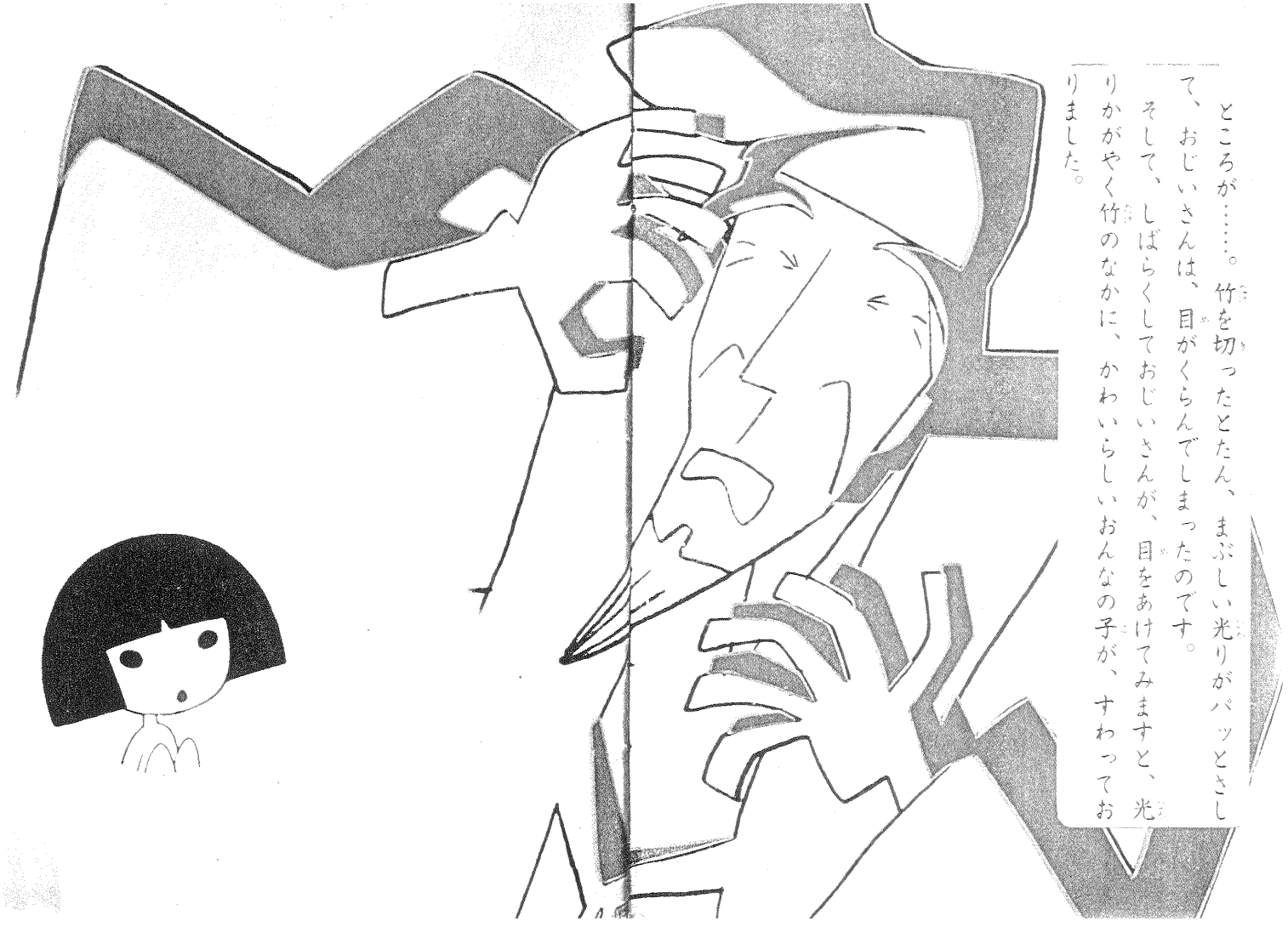
「これはきっと、こどものないわしらに、神さまがさずけてくださったんじゃのう」

「おお、ほんに。かわいらしいむすめじゃ」

おばあさんも、おおよろこびです。

ふたりは、その子に、かぐや姫というなまえをつけて、とてもかわいがりました。

さて、かぐや姫をそだてるようになってから、ふしぎなことにおじいさんは、いつも、金いろにかがやく竹を、みつけました。切ってみると、こがねがでてくるのです。



ところが……。竹を切ったとたん、まぶしい光りがパッとさして、おじいさんは、目がくらんでしまったのです。

そして、しばらくしておじいさんが、目をあけてみますと、光りかがやく竹のなかに、かわいらしいおんなの子が、すわっておりました。

おじいさんは、山から竹をとってきては、かごやざるをつくっておりましたので、人びとは、竹とりじいさんと、よんでいました。

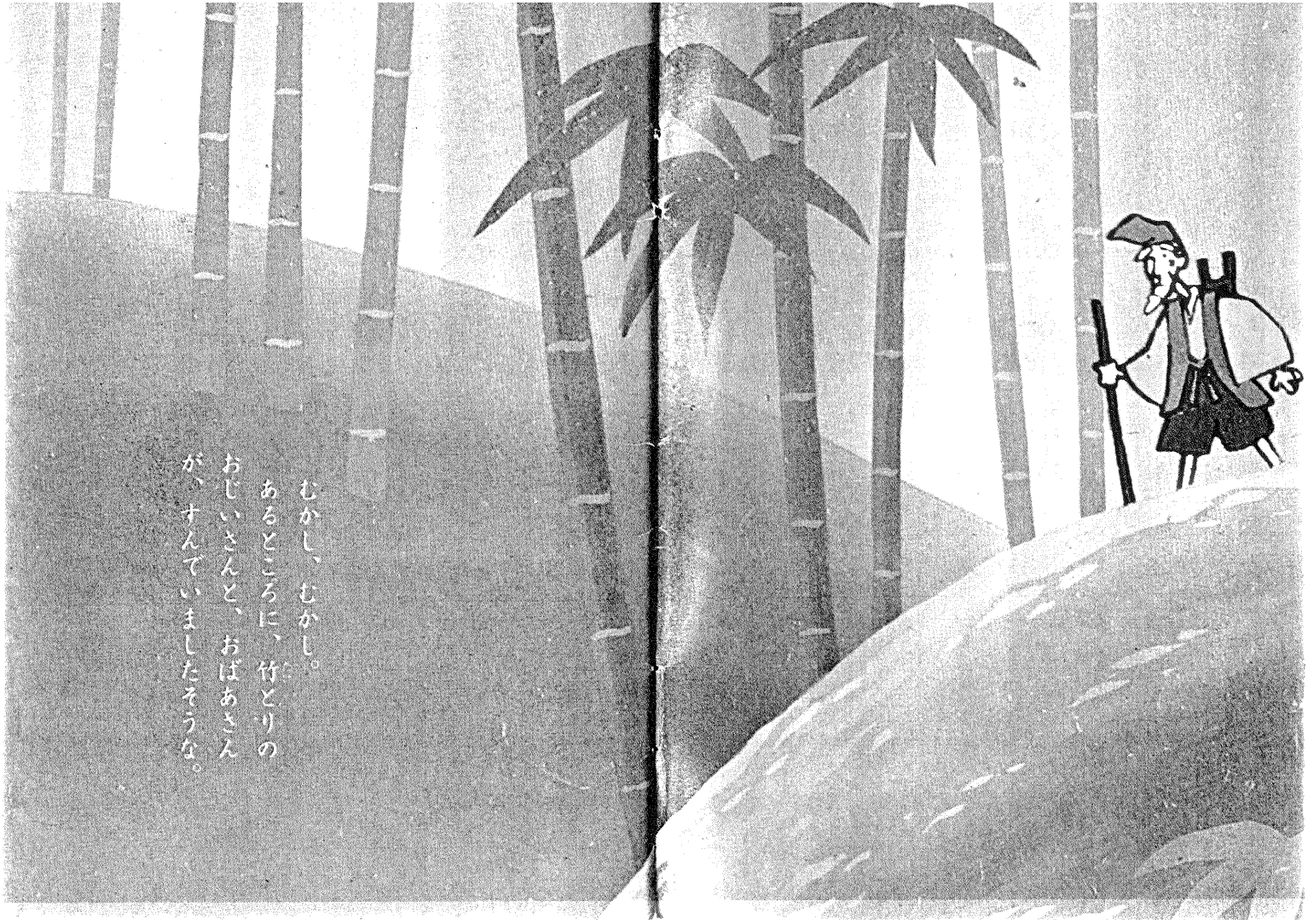
ある日のこと。いつものように、おじいさんが、山の竹やぶにはいっていきますと……。

どこからか、まばゆい光りが、さしてきました。

「はて、なんじゃろう？」

ふしぎにおもったおじいさんは、光りのほうへ、ちかづいていきました。

すると、どうでしょう。一本の竹が、金いろにかがやいているではありませんか。おじいさんは、さっそくその竹を、切ってみることにしました。



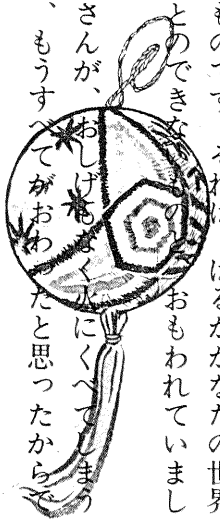
むかし、むかし。
あるところに、竹とりの
おじいさんと、おばあさん
が、すんでいましたそうな。

〈かいせつ〉　これは、人間に福をさずけて帰っていく、天女のおはなしです。

かぐや姫は、竹のなかからうまれてきますが、月の都の者ですから、やがては天上へもどらなければなりません。わが子として育てたおじいさん、おばあさんは悲しみますが、それもしかたのないことでした。

別れのときに、かぐや姫がおいていく不老長寿の薬は、昔から、人びとが求めつづけてきたものです。それは、はるかかなたの世界にあって、けっして得ることのできないものとおもわれていました。

その貴重な品を、おじいさんが、おしげもなくにくべてしまうのは、かぐや姫との別れで、もうすべてがおわったと思ったからでしょう。



まんが日本昔ばなし　第十六話

かぐや姫